11

晩年の長谷川泰について

唐沢信安

(一)はじめに

生涯に亘り、医学教育に尽した晩年の長谷川泰について報告したい。

長谷川泰が済生学舎の廃校宣言を新聞に撮載して、墓参と称して郷里長岡に一時帰省したのが、明治三十六年八月三十日のことであった。それから約十年間、全ての官職・役職を離れ、明治四十五年三月十一日に大腸狭窄症で死去する迄の泰の晩年についてのべたい。

(二)長谷川泰の望郷の念

長谷川泰は、晩年祖先の眠る新潟県見付市の智徳寺(禅寺)を度々訪れている。又生家のあった新潟県長岡市郊外の田園地帯・福井町七四四番地の生家跡を度々訪れている。

泰は福井の里を美化して、仙人の住む桃源郷と考え、多くの漢詩を残している。又明治三十八年三月の「東北日報」なる郷里新潟の新聞に、泰の日常生活を伝える詩を投稿している。それによると「門前に訪れる人も少なく、まるで禅僧の様な静かな生活を送っている」と作詩の中で述べている。その他、今日友人知人に送った書簡の中で、日露戦争下の戦場の様子を漢詩にしたためて送ったものが多く残っている。

(三)孫養子、長谷川亀之助宛の書簡

長谷川泰には実子・長谷川保定(やすさだ)が居たが、事情あって保定は医学の道を継承せずして、写真家となった。

そこで泰は、郷里長岡の縁戚の子・長谷川亀之助を養子として愛し、長岡中学に学ばせた。当時の亀之助に宛てた書簡が筆者の手元にあるので紹介する。封書には、

「新潟県古志(こし)郡新組村大字福井

長谷川亀之助殿（大至急）

東京市本郷区元町一丁目十一番地

長谷川　泰（書留）

明治四十年六月二十四日　」

「去る二十日の書留郵便にて為替(かわせ)送金せしも、未だ受領

書の返事なき。怠惰する様では以後学資お送り申さず候。早速返答いたさる可し。

六月二十四日　　長谷川　泰

長谷川亀之助殿」

然し、泰は厳しいばかりでなく、亀之助の成長を楽しみにしていた。

「長岡郵便局にて受け取る可し。

郵便為替・金拾同也。

○下宿料

○授業料

○牛乳代（以下略）」

次に別便では「お母さんを大切にして欲しい」と記している。亀之助は泰の期待に応えて、金沢の旧制第四高等学校に進み、大正十一年に東京帝国大学医学部を卒業している。

㈣済生学舎同窓会での演説

長谷川泰は声がかかると、度々旧済生学舎出身の地方の同窓会に出席し、演説をしている。明治四十二年には、長野市城山館での「北信同窓会」に出席して次の如く述べている。「諸君は宜しく自尊心を持つ可し。医術開業試験に及第したる私学出身者は、官学出身者より遥かに優秀なり」と一々実例を指摘して説明し、済生学舎卒業生の団結を呼びかけている。

㈤長谷川泰の死去

長谷川泰は明治四十四年十二月に突然の激しい下痢と腹痛に襲われた。然し翌年の正月には恢復し、読書と家族との談話に日を過していた。然し二月中旬には食欲もなく腹痛と腹部膨満に苦しんだ。大腸狭窄症に罹患す。

筆者の手元にある、泰の夫人柳子より孫養子長谷川亀之助宛の手紙では、「昨日の新聞に症状を報ぜられ、見舞人来りて困り入り候。祖父様は腸のお病気故、食事は全て流動食ばかりで、体力つかずして、ご全快迄には早くとも三月中は困難」と病状の悪化を伝えている。長谷川泰は明治四十五年三月十一日逝去。享年七十歳であった。

（唐沢内科内院）